

期 昭和五十八年十二月五日～十二月二十三日  
於 図書館三階閲覧室（本館）

古辞書いろいろ

今回は、本学図書館の貴重書類の集書である常磐松文庫の中から、国語学関係の古辞書の類を展示してみた。これらの古辞書は、江戸期に刊行された版本で、いずれも、我が国で、辞書が著はされて以後、改編増補されながら、役割に應じて、細分化し、一般に流布してきたものであり、現在の辞書の源泉となるべきものである。

(1) 倭名類聚鈔

（常磐松文庫）

源 順著

版本十冊（二〇巻） 美濃判 十行書き 寛文七年（一六六七） 村上勘兵衛刊  
天部、地部の如く、部類別に漢語を標出し、出典、音注を加え、漢文で説明を施し、和名（日本名）を万葉仮名で注記した漢和辞書で、我が国の辞書で、意義分類の整ったものとしては、最古のものである。  
承平年中（九三一～九三八）、醍醐天皇の皇女勤子内親王の命によって、編纂された。

(2) 下学集

（常磐松文庫）

版本二冊（上・下巻） 美濃判

八行書き 寛永二〇年（一六四三）刊

室町時代の普通用語を、天地・人名・家屋というように、意義に従って、十八門に分類し、用字、語源を解説した国語辞書で、辞書であると同時に百科事典的な、また教養的な性格を有している。

文安元年（一四四四）成立。元和三年刊本が、版本としては、最古で、元和三年刊のものを、振り仮名等、多少改刻して印行したのが、本書である。

(3) 二体節用集

（常磐松文庫）

版本三冊（上・中・下巻） 美濃判

十行書き

寛永十二年

（一六三五）

京都 中野市右衛門刊

室町時代の国語辞書。分類体の各部門を、いろは順に改編、増補したものが、節用集である。慶長末期に、行草書体本や草書体本が刊行されているが、この「二体節用集」は、草書体を主とし、傍に楷書を加え、内容、分

類は、「易林本節用集」に準じたものである。この後、節用集は、通俗辞書の代名詞となるほど、多くの刊本が江戸末期まで出版された。

(4) 類字仮名遣

（常磐松文庫）

荒木田盛徴著

版本一冊（七巻） 横本

寛文六年（一六六六）

荒川宗長刊

万治三年（一六六〇）

荒木田盛徴の自序あり

定家仮名遣に基づいて、いろは順に、詞を排列し、その仮名音等を正し、下に漢字をあてた国語辞書である。

(5) 和漢名数大全

（常磐松文庫）

上田元周編

版本一冊 豆本

絵入 享和三年（一八〇三）

京都

出雲寺文治郎ほか刊

元禄八年（一六九五）初刻、宝暦

二年（一七五二）再刻の後印本

天文・地理・動植物等十六の部門に分類して、名数を解説したもので、例えば、十二月の名、日本三景等について、記されている。

後代まで、たびたび再版され、また改編増補された。

(6) 永代節用無尽蔵

（常磐松文庫）

版本二冊 美濃判

絵入

段組 終り一丁欠

「天保二年（一八三一）

江戸

須原屋茂兵衛ほか刊」

漢字を、いろは順に、楷書・草書二体に排列し、よみをつけたものを中心に、絵入で、一般教養的事項を解説した通俗百科事典。庶民の間に流行したらしく、同類書が、多数出版された。